中国のアフリカへの新しい関わり–モデル国としてのセネガル–

長辻 貴之*

概要

二〇二一年三月、米国のバイデン大統領は就任後初となる公式記者会見で、民主主義と専制主義の間の闘いという表現を使用し、米国を中心とした民主主義国と中国を中心とした権威主義国の対立を明確に示した。民主主義国間の結束を強めようとする米国に対し、中国は民主主義国に接近し外交上の取り込みを試みている。二〇一八年九月に北京で中国・アフリカフォーラムを開催した約三ヶ月後に、習近平国家主席はポルトガルを訪問し「一帯一路」構想に関する覚書に署名し、その翌年にはイタリアとも同様の覚書に署名している。中国による民主主義国の取り込みは、アフリカにおいても活発化している。中国のアフリカへの関わりは、権威主義国との関係強化や、経済援助を資源により返済させる「アンゴラモデル」という文脈においてこれまで非難されてきた。一方で、本報告は中国によるアフリカの民主主義国の取り込み、中国による経済援助の形を主にセネガルに焦点を当てて考察する。

*早稲田大学 政治経済学術院 助手